

源空寺を訪ねる

<1> 入谷の寺町へ

上野駅には正面口の他に不忍口・広小路口・浅草口・公園口・入谷口という出入口がある。一番北側にある大連絡橋通路と公園口通路を結ぶ口の字型の通路の東の端に「入谷口」を示す案内板がある。通路の突き当たりを左折して鶯谷方面に進み、階下に下りると「入谷通路」になり、さらに鶯谷方面へ進むと「入谷口」がある。まるで豪邸の裏木戸を開けて出たような雰囲気、いきなり東上野の町外れに飛び出す。

入谷口を出ると目の前に岩倉高校がある。学校の南側の路地に入り東へ向かうとすぐに昭和通りを横切る東上野交差点。昭和通りの上は首都高速道路で、トンネルを潜り抜けるような感じになる。このあたりは東上野4丁目だが、元は神吉町（かみよしちょう）と言っていた。明治2年に浅草神吉町として始まったが、それまでは幡随院門前町だった。「神吉」という町名は、「神」と「吉」という縁起の良い文字を並べたもので、今風に言えば瑞祥地名だったらしい。

幡随院は、慶長8年（1603年）に徳川家康が江戸開幕にあたり浄土宗知恩寺の幡随意を招聘して神田駿河台に創建した寺で、正式名称は神田山新知恩寺と言った。

元和3年（1617年）に神田川開削工事に伴い下谷池之端へ移転したが、明暦3年（1657年）の振り袖火事で焼失。万治2年（1659年）に浅草神吉町に再建された。

その後も江戸名物の大火によって何度となく被害を受けたが、徳川家の手厚い加護もあり生き延びた。さらに関東大震災で焼失してしまい、再建したものの昭和12年に自火焼失し、昭和15年（1940年）に武蔵小金井に再建されて現在に至っている。

幡随院があった場所には、今は上野学園などが建っている。

清洲橋通りを横切る前あたりから、路地の先にスカイツリーが見えるようになり、いくつも寺が点在する寺町になる。どの路地に入っても、小さな区画内に数軒のお寺があり地図を見ても面白い。

清洲橋通りを渡って最初の角を左に曲がって北に向かうと、モダンな造りの上野小学校が視界に入ってくる。この辺りは浅草区浅草清島町と言われているところで、古い地図を見ると上野小学校は清島小学校となっている。

小学校の先を右に曲がって東向きに進むと、ほどなくして源空寺が現れた。



<2> 源空寺

正式名称は、浄土宗五台山文殊院源空寺。

天正18年（1590年）浄土宗の僧円誉道阿が湯島に草庵を結んだのが始まりと言われている。

道阿は米沢に生まれ、諸宗を学んだが最終的には幡随意に師事して浄土教を学んだ。湯島の草庵で念仏三昧の暮らしをする中、多くの人々の帰依を集めた。

慶長9年（1604年）に、これに帰依した徳川家康が道阿を江戸城に招き、寺領と堂宇と寺の名（源空寺）を与えた。道阿が登城する前夜に見た夢の中に、法然上人（源空）が現れて、日頃の善行・精進を喜んだことから寺の名を源空寺としたという説もあるらしい。

明暦3年（1657年）に火災（明暦の大火）で焼失したことから現在の場所で再建された。境内にある銅の鐘は徳川家光の寄進によるもの。前述の幡随院と同様に、度々大火や戦災の犠牲になったが、そ



の都度再興されてきた。

門前の道を挟んで南側に墓地があり、狭い敷地の中に整然と区画されていて歩きやすい。ひとつひとつの墓石の文字を読み取りながら歩くと様々な歴史が感じられて面白いが、時間の都合もあるので適度なところで切り上げることにした。

伊能忠敬・幡随院長兵衛・谷文晁などの著名人の墓が中央部に並んでいて、墓石の風貌を見るのも面白かった。それぞれは、国や都の指定史跡になっている。

源空寺の地図は <https://yahoo.jp/1e3bAB>



<3> この寺へ来たのは何故か

高校時代から数えて60余年の付き合いになる友人が、この夏他界した。

学年は同じだがクラスは別だったにもかかわらず、頻繁に私のクラスへ遊びに来ていて、いつの間にか親しい間柄になった。

当時登山を始めていた私の誘いで、何度か奥武蔵や奥多摩の山旅をしたことがある。

卒業後は時計の会社に、私は電子計算機の会社に勤めた。

時計の会社には、私と同じクラスのM君も勤め、私が勤めた電子計算機の会社には同じクラスのK君も勤めた。そんなこともあって、定年退職後にもこの四人の交流が続いた。

友人は、定年退職後にいくつかの病を体験し闘病の末、夏の暑い日に旅立った。

訃報を受け取った日の日記の最終行に一行書き加えた。

八朔に逝きし友あり空ながむ

江戸川区の平井で印房を営む父親が源空寺に先祖代々の墓を持っていた。

「俺の家の墓は浅草のお寺にある。幡随院長兵衛・伊能忠敬・谷文晁の墓と一緒に。」と何度か聞いたことがある。

コロナ騒動のさなか、家族でさえ臨終への立ち合いが困難な状況で、60年余の親友とはいえども入院末期の顔を見ることもなく、棺を拝むこともなく逝ってしまった。

そんなわけで、「他界した」という実感もなく別れることになり、何となく中途半端な心持ちだった。

ご子息から菩提寺の所在地を聞いて、この旅を決意した。

線香を手向け、掌を合わせるにより、正式にお別れすることができたような気がした。

振り返れば、冬の太陽が大きく傾き、冷気も近づいていた。メモ帳に走り書きをして寺を後にした。

香をまとい友の墓石の影長し

以上